# 草双紙に描かれたぶんぶく茶釜

金子綾夏

## はじめに

現代にも伝わるぶんぶく茶釜の昔話は、近世期には大別して①茂林寺の伝承、②赤本『ぶんぶく茶釜』に基づいた二種の内容が流布していた。また、赤本以降の草双紙にも趣向として取り入れられており、中には①や②には無かった要素が複数の草双紙内で共通してみられ、独自に発展していったことがうかがえる(注一)。

第一節でみるように、先行研究では①②と各草双紙との繋がりについては言及されているが、各草双紙間の関連については十分な考察がされていない。

そこで本稿では、ぶんぶく茶釜の趣向を取り込んだ草双紙を「ぶんぶく茶釜もの」として一括し、内容の共通点や相違点、挿絵の比較、流行語との結びつきなどの視点から考察し、「ぶんぶく茶釜もの」を通時的に捉え、赤本以降の草双紙間における影響関係を明らかにしていく。

## 一．先行研究

小谷成子(注一)によると、赤本の『ぶんぶく茶釜』には、近世中期頃に鱗形屋から刊行された作者未詳の国立国会図書館蔵本（以下、「鱗形屋本」）と、享保頃、近藤清春画「ゐつゝや」刊行のものを稀書複製会が複製したもの（以下、「ゐつゝや本」）があるという。

また水谷不倒(注二)によると、この二冊の赤本に先行する作品として『京東山化け狐』という赤小本があったことがわかっている(注三)。なお『京東山化け狐』は書名

の通り、狐が登場するものである。

前掲の小谷によると、ゐつゝや本と鱗形屋本は似た挿絵・筋ではあるが、『京東山化け狐』と同様に狐が登場するゐつゝや本の方が古い形を残しているとされる。加えてゐつゝや本は、読者（子ども）が意識された描かれ方であり、滑稽味を帯びた表現が多い。鱗形屋本には画工名は無いが、ゐつゝや本には近藤清春の名が記されている。このことから、書に名を記すことが許された近藤清春の力量が示されていると指摘されている。また、ゐつゝや本・鱗形屋本とそれ以降の草双紙では話の展開において大きな違いがあり、その一例として、十返舎一九『増補分福茶賀間』（寛政十一年〈一七九九〉刊）が紹介されている。この作品は悪い坊主から和尚が狸を助け、狸が恩返しをし、坊主とも和解するという筋である。

志田義秀（注四）は、伝説や近世期の随筆を中心に取り扱い、「ぶんぶく茶釜」が他の童話と異なる点として、第一に「国所が話し出されているところ」、第二に「茶釜が狸に化けること」、第三に「道徳的教訓を含んでいないところ」を挙げている。また、ぶんぶく茶釜の物語は伝説から変化した中間形式を経て、昔話として話されるような形式となっており、伝説的な痕跡を留めていて純粋の童話には成り切ってはいないとしている。さらに「とんだ茶釜」という流行語や茂林寺の伝承と結びつけられ、趣向の一つとして後の作品に利用されていることが紹介されている。

網野可苗（注五）は、茂林寺の伝承について、菊岡沾涼『本朝俗諺志』（延享三年〈一七四六〉刊）は近世中期以降の草双紙の重要な取材源となっており、ぶんぶく茶釜においても鳥居清満『分福丹頂鶴』（宝暦八年〈一七五八〉刊）などが作られていることから、『本朝俗諺志』は茂林寺系説話が広く認知されるきっかけを作った書物であるとしている。また赤本『ぶんぶく茶釜』において、舞台設定はさほど重要ではなく、「分福茶釜に毛が生えた」という流行語を取り込むことが眼目であったとし、次第に守鶴を介在させる必要がなくなり、茂林寺を作品に深く関わらせることがなくなったと考察している。

榎本千賀（注六）は、茂林寺の縁起や近世期の文学作品、全国の伝承を検証し、ぶんぶく茶釜の話がどのように広がっていたのか考察している。

以上のように、先行研究では、主に①茂林寺の伝承について述べたものと②赤本『ぶんぶく茶釜』について論じたものが多く、ぶんぶく茶釜の趣向を取り入れた草双紙については翻刻や解題等（注七）は行われているが、各作品間の関連については十分な考察がされていない。そこで、以下では「ぶんぶく茶釜もの」における作品同士の繋がりに留意しつつ、それらの影響関係を通時的に考

察してみたい。

## 二、ぶんぶく茶釜を題材とした草双紙

### ㈠　二つの赤本『ぶんぶく茶釜』

先述した通り、赤本『ぶんぶく茶釜』には、ゐつゝや本と鱗形屋本が存在する。ここでそれぞれの梗概をまとめておく。また、ぶんぶく茶釜で登場する動物は狸であるが、作品によっては「むじな」と表記されることがある。どの作品においても、むじなと狸が厳密に区別されていないため本稿では「むじな」と書かれているものも狸として扱った。

では、赤本二作品の梗概をみてみよう。

**ゐつゝや本**

それほど遠くない昔、東山殿の茶道坊主ぶんぶくが秋の末に山に出かけた。景色を眺めていると、一匹の狐を見つけ生け捕りにして帰る。四人の坊主は狐を料理しようとし、狐は隙を見て逃げ出し草むらに入り茶釜に化ける。追いかけてきた坊主は茶釜を拾って帰る。茶釜で茶を煮ようとすると茶釜に尾が生え、坊主達は大声を上げて「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」と騒いだ。

この事を聞いた東山殿は四人を追い出す。一方、狐はひどい目に遭ったと狸に話し、狸は仇をとることを約束する。坊主達が山陰で休んでいたところを復讐しようとするが気付かれ、狸は生け捕りにされる。坊主達は狸を土産に東山殿のもとへ行き、坊主達は褒美を貰い、狸は薬にされた。

**鱗形屋本**

茶道坊主ぶんぶくが秋の山に出かけ、狸を捕らえる。寺に帰り坊主達は料理を始めるが狸は隙を見て逃げ出す。

狸は草むらに隠れ、茶釜に化ける。追ってきた坊主達はこの茶釜を持ち帰る。茶釜で湯を沸かすと熱さに耐えられなくなった狸が変化を解く。四人は呆れ、「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」と囃し立てた。東山殿は四人が狸に化かされたことを知り、追い出す。四人が行き倒れているところに復讐を試みた狸は生け捕りにされ、四人は東山殿にそのことを報告し褒美を貰う。

両作品には、茶釜に化けた狸（狐）が火にかけられ、変化を解いた際に「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」と坊主達が囃し立てる点が共通している。この囃し言葉は、ぶんぶく茶釜の趣向を取り入れたほかの草双紙にもみられる（三節二項で後述）。また相違点としては、ゐつゝや本では狐と狸が登場するが、鱗形屋本では狸だけが登場する点が挙げられる。さらに、挿絵の特徴として、ゐつゝや本には物語の筋には登場せず、読者と同じように物語

を楽しんでいる子ども達が描かれていることが指摘されている（注一）。

## (二) 茂林寺の伝承と草双紙

上野国舘林茂林寺に伝わる伝承は、松浦静山『甲子夜話』（文政四年〈一八二一〉～天保一二年〈一八四一〉成）、『本朝俗諺志』、作者未詳『分福茶釜略縁起』（成立年未詳）などの資料から確認することができる（注四）。話の内容に多少の異同はあるが、おおよそは以下の通りである。

上野国茂林寺にはかつて守鶴という老僧がいた。守鶴は不思議な茶釜を持っており、その茶釜は沢山の客に茶を淹れても湯が尽きることなく、皆に福を分け与えたことから分福茶釜と呼ばれていた。ある時、守鶴の部屋に狸が眠っており、守鶴が狸であるという噂が広まる。自分の正体を明かした守鶴は、自分は唐から日本に渡り八〇〇年程過ごしていたと告げ、源平合戦の様子や釈迦の説法の様子を見せると寺から去って行く。後に守鶴は、守鶴宮として一山の鎮守となった。

この茂林寺の伝承を描いた草双紙に、青本の鳥居清満『分福丹頂鶴』（宝暦八年〈一七五八〉刊）がある。また「ぶんぶく茶釜もの」の中には、物語の筋に直接関わらないが、鳥居清経『分福茶釜功薬鑵平』（宝暦一〇年〈一七六〇〉刊）、同『狸の土産』（安永元年〈一七七二〉刊）などの作品には茂林寺の名が登場している。このことから当時、ぶんぶく茶釜の物語と茂林寺の伝承が結びついていたことが考えられる。

「ぶんぶく茶釜もの」の中には、狸が化物として描かれ、豪傑・英雄に討ち取られるという展開のものがあり、その下限は作者未詳『茶薄山蟇気遊来』（安永五年〈一七七六〉刊）とされている（注八）。こうした展開を持つ他の作品には『狸の土産』がある。前者では那須与一が、後者では坂田金時が狸を討ち取る。

まず『茶薄山蟇気遊来』についてみると、本作に那須与一が登場する理由として、茂林寺に伝わる伝承とそれを元にした草双紙（『分福丹頂鶴』）との繋がりが考えられる。茂林寺の伝承では、狸（守鶴）が寺を去る際に源平合戦の様子を見せる場面がある。そして、この伝承を受けて作られた『分福丹頂鶴』には、当該場面が挿絵として描かれている【図一】。杉本紀子はこの挿絵について右上に扇の的と船に乗った女性が描かれ、この船と的が八丁表左上の弓を持ち、馬に乗る武将と対応しており、この部分が那須与一が扇の的を射る場面であると解説している（注九）。

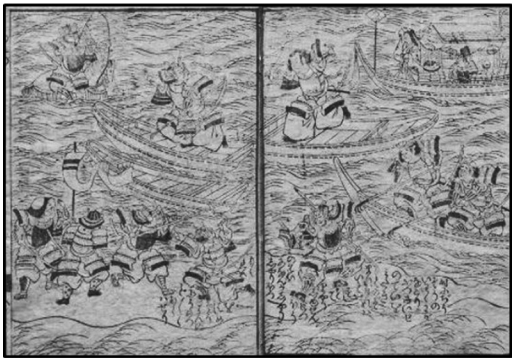
このことを踏まえると、『茶薄山蟇気遊来』で那須与一が弓で狸を射抜き、退治する展開は、茂林寺の伝承とそれを元に作られた草双紙との繋がりが考えられるので

はなかろうか。

次に『狸の土産』と坂田金時について考えていく。アダム・カバット（注一〇）は、化物退治談について以下のように述べている。

架空の人物である坂田金平は、源頼光の四天王の一人、坂田金時の息子という設定になっている。知恵よりも、無双の武力によって化物を一瞬で倒す豪傑である。父親の金時も、四天王の一人として、鬼の酒呑童子や土蜘蛛の退治談が伝えられ、化物退治と縁がないわけではない。（中略）金平浄瑠璃が草双紙の金平の造型に多大な影響をあたえているが、「金平浄瑠璃」の作品群では、必ずしも金平ばかりが主人公というわけではない。場合によっては親の金時を含む四天王、もしくは全く別の豪傑が活躍するのである。

このように当時、化物と坂田金時はしばしば一緒に描かれていたことがわかる。本作において、狸は化物の先生として描かれ【図二】、坂田金時が戦う相手である。先行する赤本では単に動物として描かれていた狸が本作では化物として設定されている。すなわち、既に草双紙において化物退治の定番となっていた坂田金時を利用し、本作においてぶんぶく茶釜の狸が化物であることを強調しようと試みたと考えられるのである。



【図一】鳥居清満『分福丹頂鶴』
（国立国会図書館蔵）

【図二】鳥居清満『狸の土産』
（東京大学総合図書館霞亭文庫蔵）

以上をまとめると、「ぶんぶく茶釜もの」に歴史的に著名な人物が描かれる理由として、『茶薄山蟇気遊来』の那須与一には『分福丹頂鶴』との関わりが考えられ、『狸の土産』の坂田金時には、化物としてぶんぶく茶釜を描くために利用された可能性が考えられた。また、両作品ともぶんぶく茶釜を化物として描いている点、それを代表的な豪傑・英雄が退治する筋が共通している点から、「ぶんぶく茶釜もの」という括りの中でも近しい関係にあると考えられる。

なお本稿では、化物と坂田金時の関係性については言及したが、那須与一と化物については十分な考察に至らなかった。しかし、化物退治の定番である坂田金時の代わりに那須与一に化物退治をさせた点に『茶薄山蟇気遊来』の新しさがあり、その背景には『分福丹頂鶴』の存在があったことがうかがえる。

また、時代が下った天保前期頃の作品に『化ものがたり』がある。この作品は、坂田金時が様々な化物を討ち取るという筋で、ここにもぶんぶく茶釜の狸が化物として登場する。なお、描かれた狸にはゐつゝや本の影響がみられることが指摘されている（注一一）。『化ものがたり』においてゐつゝや本と似た茶釜の姿が描かれたことは当時、赤本が人口に膾炙し、この描かれ方が一つの型になっていたのではないか。このように、「ぶんぶく茶釜もの」の作品は、先行する作品の影響を受けながらも新趣向が導入され、内容が多様化していったのであった。

### ㈢　挿絵と本文の比較　茶釜に化けた狸・狐の描写

ぶんぶく茶釜を描いた草双紙には、狸（狐）が挿絵に描かれている。そこで以下では、ゐつゝや本、鱗形屋本、鳥居清経『分福茶釜功薬鑵平』、鳥居清経『狸の土産』、十返舎一九『増補分福茶賀間』を取り上げ、狸（狐）が茶釜に変化する場面の挿絵と本文に注目し、考察していく。

その際、①茶釜に化けている動物の種類、②茶釜に化けている状況、③茶釜に化けた際の挿絵の描かれ方、④茶釜に化けている状態に関する本文（注一二）、⑤「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」という囃し言葉（注一三）、⑥茶釜の大きさ、⑦「とんだ茶釜」という言葉の有無（注一四）の七つの観点に注目し、箇条書きで記していく。

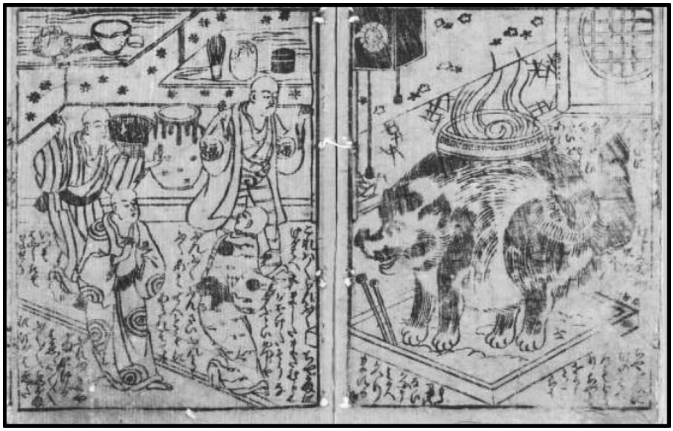
それでは一作品ずつ確認してみよう。

●ゐつゝや本（近藤清春『ぶんぶく茶釜』）【図三】

【図三】ゐつゝや本
（近藤清春『ぶんぶく茶釜』国立国会図書館蔵稀書複製会本）

①狐。
②熱さに耐えられなかった狐は変化を解き、これを見た坊主が囃し立てる場面。右の丁にいる子どもは物語の登場人物ではなく、読者と同じく物語を楽しむ存在として描かれている。
③茶釜であった様子を残しながら、頭、足、尻尾が部分的に狐に戻っている。胴体部分に少しだけ毛が生えているように描かれ、囃し言葉の「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」を意識したように考えられる。
④「あつさはこらへかたく思はすしらすせうたいのしつほをによつとつき出せば」とある。
⑤坊主達が「皆口〳〵にこへを上ぶんふくちやかまにおがはへたぶんぶくちやかまにめがはへたと」と囃す様子が本文に書かれ、台詞には、「ぶんぶくちやかまにめができたもひとつかえして〳〵〳〵な」とある。
⑥囲炉裏の中にいたことから一般的な茶釜の大きさであると推測できる。
⑦本作では「とんだ茶釜」という言葉は見られない。
以上のように、ゐつゝや本では囃し言葉の「尾が生えた」「目がはえた（目ができた）」を挿絵に反映し、茶釜の状態から狐の状態に戻るまでの中間の部分が挿絵として描かれていた。また、茶釜部分にも毛が生え、元の囃し言葉「ぶんぶく茶釜に毛がはえた」も意識されて描かれているといえる。

●鱗形屋本（作者未詳『ぶんぶく茶釜』）【図四】

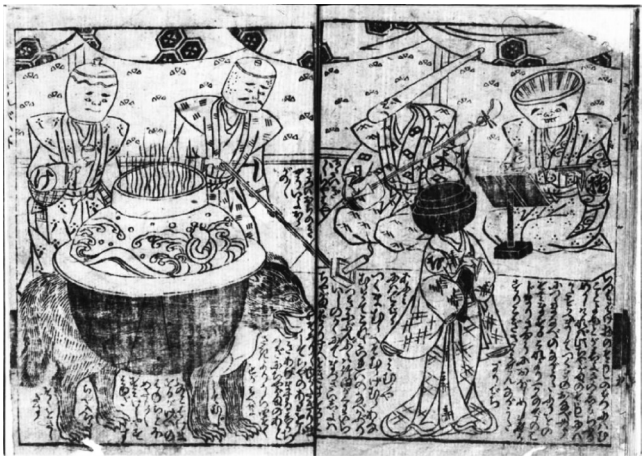


【図四】鱗形屋本
作者未詳『ぶんぶく茶釜』（国立国会図書館蔵）

①狸。
②ゐつゝや本と同様に茶釜と思って持ち帰った坊主達によって火にかけられた場面。
③ほぼ狸の姿に戻り、全身が毛に覆われている。変化の名残で背中には茶釜の口がある。
④「ちやがまになりしが□□（カスレ）ひ、しだいにあつくなり、ぜひなくせうたいをあらわす。」とある。
⑤挿絵中の坊主の台詞に「これは〳〵、ぶんぶくちやがまに毛が生えた〳〵〳〵。ぶく〳〵ちやがまに毛が生えた。」とある。
⑥本文の内容や、囲炉裏の中にいることから一般的な茶釜の大きさであると推測できるが、挿絵上ではやや大きめに描かれている。
⑦本作において「とんだ茶釜」という言葉は見られない。

以上のように、鱗形屋本では、背中にある茶釜の口部分と丸みを帯びた体から狸が化けていることがわかる。また、囃し言葉の「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」の通り全身が毛に覆われ、ほとんど狸の姿に戻っている。さらに、『京東山化け狐』やゐつゝや本では、狐が茶釜に化けていたが、鱗形屋本ではより体の形が丸く、茶釜の形に近い狸に変わっていったという可能性が考えられる。

●鳥居清経『分福茶釜功薬鑵平』【図五】

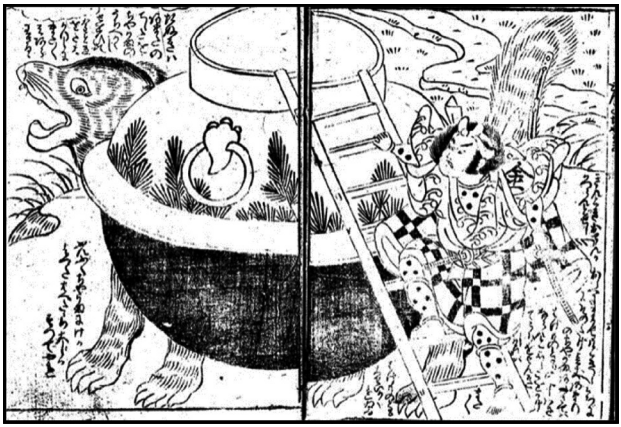


【図五】鳥居清経『分福茶釜功薬鑵平』
（東京都立中央図書館 加賀文庫蔵）

①狸。
②おちゃこ（茶釜娘）とひしゃく丸平（柄杓男）の婚礼の祝いの席の場面。
③狸の腹の部分が茶釜になっており、頭や足などは茶釜と分けて描かれている。
④「ぶんぶくは竹田がくわいらいしのかくにてまづさいしよはちやがまばかりすへをきまするとそろり〳〵ゆがたぎりまして、ちやのあわをふきあげまするしうち、つぎにちやがまのあとさきよりかしら四そく、をがはへましてむじなとばけまするがげいのはねちとほめたり〳〵」とある（注一五）。
⑤本作において囃し言葉は無い。
⑥本文の中で大きさは言及されていないが、擬人化された周囲の器物と比較してみるとやや大きめに描かれている。
⑦銅こ先生に襲われたおちゃことひしゃく丸平をやかん平が助ける場面。やかん平は大きな風を起こし、二人を飛ばし二人を逃がす。この場面で「これがほんのちやかまがやくわんとばけた」とあり、おちゃこ（茶釜）を逃がし、やかん平が登場する展開を「とんだ茶釜」という言葉に重ねている。

以上のように、『分福茶釜功薬鑵平』での狸は主人公を助ける「やかん平」の相棒として登場しており、狸は結婚式で芸として茶釜に化けていた。挿絵の描かれ方は、腹の部分だけが茶釜として描かれているという特徴があった。

●鳥居清経『狸の土産』【図六】



【図六】鳥居清経『狸の土産』
（東京大学総合図書館霞亭文庫蔵）

①狸。
②坂田金時を罠にかけようとしている場面。
③茶釜の部分と狸の部分がはっきりと分けて描かれている。
④茶釜に化けている状態の本文は特に見られない。
⑤「分福茶釜に毛が生へた。生へたら大事か剃つてやれ」とあり、『双生隅田川』を踏まえた表現であると考えられる。
⑥本文の中で「丈壱丈余りの茶釜」と書かれ、約三メートル程の大きさであることがわかる。
⑦本作において「とんだ茶釜」という言葉は空を飛ぶ茶釜という意味で登場する。金時が茶釜を掘り当てると、その茶釜に翼が生え、空を飛ぶ。この場面で「これが本の飛んだ茶釜だ」という台詞がある。茶釜が埋まっていた場所は笠森であり、笠森お仙（注一六）が意識されていることがわかる。

以上のように、『狸の土産』ではぶんぶく茶釜の狸が化物の先生として登場し、他の化物を率いる存在として描かれていた。他の作品と比べると、具体的な大きさが言及されるなど、その大きさが強調されている。囃し言葉は、『双生隅田川』（注一三）と同様であるが、茶釜には毛が生えておらず、囃し言葉を挿絵に反映していない。時代が下るごとに「ぶんぶく茶釜に毛が生えた」という言葉が定着・形骸化し、挿絵へ反映する意識が薄れていった可能性が考えられる。また、茶釜部分と狸の部分の書き分け方が『分福茶釜功薬鑵平』に似ていることが指摘でき、これは両作品の作者がともに鳥居清経であるため、近い描き方になったものと考えられる。

●十編舎一九『増補分福茶賀間』【図七】【図八】

【図八】　　【図七】

十返舎一九『増補分福茶賀間』（東京都立中央図書館　加賀文庫蔵）

①狸。

②寺の生臭坊主であるよくしんから逃げ、和尚の茶釜（ぶんぶく茶釜）に化けているという場面。

③足や顔は無く、茶釜に狸の尻尾が生えたように描かれている。

④茶釜に化けている状態の本文は無い。

⑤和尚の台詞に「けのはへたもおかしなもんだ」とある。この台詞の前に地の文で和尚の所持する茶釜の名前がぶんぶくという茶釜であることが説明され、囃し言葉を踏まえていると解釈できる。

⑥よくしんが和尚の茶釜と見違えていることから一般的な茶釜の大きさであるとわかる。

⑦よくしんによって質屋に持ってこられた茶釜（狸が化けたもの）が、やかんに姿を変えた場面で「これがほんのとんだちやかまがやくはんとばけた」とある。

以上のように、『増補分福茶賀間』では茶釜に尾が生えており、他の作品とは異なる描かれ方がされていた。加えて物語の中で狸は、茶釜の他にやかんに化けており【図八】、他作品と異なる。また、茂林寺の伝承との繋がりとして、和尚が茶を好み、茶釜を所持している点や、和尚の部屋の襖絵に鶴が描かれている点など、和尚の設定が守鶴を意識したものであると考えられる。

## ㈣　ぶんぶく茶釜と「とんだ茶釜」という流行語

今回取り上げた作品の中で『分福茶釜功薬鑵平』『狸の土産』『増補分福茶賀間』には、「とんだ茶釜」に類する言葉が共通して見られる。しかし、この言葉の用いられ方は作品ごとに異なっていることから、流行語を取り込みながらも、作品に独自性を出そうとしていたことがうかがえる。この流行語の起源である笠森お仙から連想がはたらき、当初は流行語の響きのみが利用されていたが、次第に笠森お仙の一連の騒動も趣向の一つになっていったのではないか。『狸の土産』では笠森という地名や、狐が金時を化かすための美人として登場させたりしている。『分福茶釜功薬鑵平』でも、おちゃこが美しい看板娘と設定され、笠森お仙が「ぶんぶく茶釜もの」の作品に取り込まれていることがわかる（注一七）。

## おわりに

近世期におけるぶんぶく茶釜の話には、茂林寺の伝承と赤本の二つの型が主に流布していた。草双紙において、流布している内容通りに物語を書くだけでなく、別の作品の中に一つの趣向として取り入れられてもいた。本稿では、ぶんぶく茶釜の趣向を取り入れた草双紙を「ぶんぶく茶釜もの」と呼称し、そこに含まれる複数の作品を比較し、挿絵や本文を取り上げ、それぞれの描かれ方の分析を行った。

その結果、ゐつゝや本、『狸の土産』、『分福茶釜功薬鑵平』では挿絵の描かれ方が類似していた。また趣向においては、『茶薄山蟇気遊来』と『狸の土産』では豪傑・英雄の趣向が、『分福茶釜功薬鑵平』と『狸の土産』では笠森お仙を彷彿とさせる趣向がみられた。他にも『分福丹頂鶴』、『分福茶釜功薬鑵平』、『狸の土産』、『増補分福茶賀間』では茂林寺の伝承が影響していると考えられる部分があった。このように、「ぶんぶく茶釜もの」の作品にはその作品間で影響関係がうかがえた。一方、茶釜に化ける状況や、物語における狸の立場などは異なっていた。これは同じ昔話を出発点としながらも、独自性を求め、あらゆる趣向と融合させようとした作者の工夫の結果であろう。現代に伝わるぶんぶく茶釜の物語は茂林寺の伝承や草双紙の内容とは異なっている。しかし、狸が人間に協力する展開は『増補分福茶賀間』と通じている。また、狸が曲芸を行う展開は『分福茶釜功薬鑵平』と似通っている。こうした近世期の「ぶんぶく茶釜もの」の要素は現代に伝わっているあらすじ（注一八）にも影響していることが考えられる。

**注**

注一：小谷成子「ぶんぶく茶釜考―話の変遷を中心に―」（『愛知県立大学文学部論集国文学科編』三四号、一九八四年）。

注二：水谷不倒『草双紙と読本の研究』（水谷不倒『水谷不倒著作集』第二巻所収、中央公論社、一九七三年うち「赤本　宝永―宝暦」の「近藤清春」項）。

注三：現在、原本の所在は不明。

注四：志田義秀「文福茶釜の伝説童話」（志田義秀『日本の伝説と童話』所収、大東出版社、一九四一年）。

注五：網野可苗「化物としてのぶんぶく茶釜」（木越治・勝又基編『怪異を読む・書く』所収、国書刊行会、二〇一八年）。

注六：榎本千賀「茂林寺と分福茶釜」（『大妻女子大学紀要・文系』二六号、一九九四年）。

注七：翻刻・解題の先行研究には杉本紀子「黒本・青本『福分丹頂鶴』について」（『叢：近世文学演習ノート』三八号、二〇一七年）、同「鍵と型で読む…『分福丹頂鶴』」（叢の会編『江戸の絵本読解マニュアル　子どもから大人まで楽しんだ草双紙の読み方』所収、文学通信、二〇二三年）、有働裕「分福茶釜功薬鑵平」（『叢：草双紙の翻刻と研究』一八号、一九九六年）、同「『とんだ茶釜』について」（『叢：草双紙の翻刻と研究』一九号、一九九七年）などがある。

注八：中野三敏・肥田晧三編『近世子どもの絵本集　上方篇』、岩波書店、一九八五年。なお、『茶薄山蟇気遊来』の作者は寺沢昌次一門の誰かと推定されている。

注九：杉本紀子「黒本・青本『分福丹頂鶴』について」（注七）。また同氏の「鍵と型で読む…『福分丹頂鶴』」では、源平合戦を見せる展開は『本朝俗諺志』や他の草双紙にも見られる型であることが指摘されている。ただし、『本朝俗諺志』には那須与一に関する言及は見られないことから、『分福丹頂鶴』の挿絵に那須与一が描かれている点は本作の特徴であると言える。

注一〇：アダム・カバット「初期草双紙の化物尽くしの形成と発展」（アダム・カバット『江戸化物の研究　草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』所収、岩波書店、二〇一七年）。

注一一：鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集江戸篇』、岩波書店、一九八五年。

注一二：各作品の本文引用は以下によった。鱗形屋本は、『近世子どもの絵本集　江戸篇』、『分福茶釜功薬鑵平』は有働裕「分福茶釜功薬鑵平」（注七）、『狸の土産』は木村八重子・宇田敏彦・小池正胤校注『新日本古典文学大系八三　草双紙集』（岩波書店、一九九七年）。ゐつゝや本と『増補分福茶賀間』は執筆者が翻刻を行った。なお、執筆者が翻字を行ったものは、清濁は原文をそのまま再現する方針で翻刻を行った。

注一三：この言葉の由来は、近松門左衛門『双生隅田川』（享保五年〈一七二〇〉初演）とされる。能「隅田川」、浄瑠璃「隅田川」などを元に、吉田家のお家騒動に霊木の祟りなどの怪談を付加し怪奇性を強めたもので、作中に「ぶんぶく茶釜に毛が生へた。茶筅で剃ってもまだ剃れぬ。」という台詞があり、本稿ではこれに関係すると考えられる部分を記した。

注一四：松原哲子「草双紙における流行語の位置」（『近世文芸』六八号、一九九八年）によると、「とんだ茶釜」について以下のように紹介されている。

「驚いた」の意で、『辰巳園』をはじめ諸書で論じられているが、笠森お仙の評判と明和七年のお仙の騒動によって明和ごろ流行したことは確かなようである。

注一五：ここに出てくる「竹田が傀儡師」とは、竹田近江のからくり人形芝居のことであり、『日本大百科全書』（小学館　一九九四年）によると「竹田近江機捩戯場（たけだおうみのからくりしばい）」「竹田のからくり」として、浪速名所の一つに数えられるほど人気を博していたとある。

注一六：明和元年頃、江戸・笠森稲荷の社前の茶屋で評判になった看板娘。次第に浮世絵や狂言芝居の題材になるなど広く名を知られるようになるが明和七年に結婚し、店から姿を消した。「とんだ茶釜がやかんに化けた」という言葉は、「茶屋に美人な茶釜娘を見に来たつもりが、やかん頭の親父しかいなかった」という意味で用いられ、流行語となった。

注一七：有働裕「分福茶釜功薬鑵平」（注七）において「本書は笠守おせんを素材として、そこへさまざまな趣向を盛り込んだ作品である」と指摘がある。

注一八：現在、「ぶんぶく茶釜」の物語は口承伝承や縁起等様々な形態で流布している。本研究では草双紙を研究対象としているため、現代版として採用するあらすじも文献資料である巌谷小波著『文福茶釜』（『日本昔噺一二編』博文館一八九五年）を採用する。本書のあらすじは次のようになっている。

上野国舘林の茂林寺には茶が好きな和尚がいた。ある時、弟子の坊主達が茶釜から狸の頭・手足・尻尾が生えて歩き回るのを見て驚く。これを和尚に知らせるが、信じなかった。和尚が釜を炉に掛けたところ、釜が「熱い」と言って炉の外に飛び出す。和尚は釜を怪しんで屑屋に売る。その茶釜は屑屋に「私は狸だが、芸をするから養ってほしい」と願うと、屑屋は見世物小屋を作り、茶釜狸の芸で儲かった。屑屋はお礼に和尚の寺を訪れ、儲けたお金の半分を釜に添えて渡した。後にこの茶釜は茂林寺の宝物となった。

## 図版引用元

・近藤清春『ぶんぶくちやがま』ゐつゝや（稀書複製会による複製本）（国立国会図書館蔵　国立国会図書館デジタルコレクション　請求記号 199-432）
（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11922270）
・『ぶんぶく茶釜』鱗形屋　江戸中期　（国立国会図書館蔵　国立国会図書館デジタルコレクション　請求記号寄別5-3-2-12）
（https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541129）
・鳥居清経『分福茶釜功薬鑵平』宝暦一〇年〈一七六〇〉刊（東京都立中央図書館　加賀文庫蔵）国書データベース　請求記号 25-43-27）
（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100053175/viewer/2）
・鳥居清経『狸の土産』安永元年〈一七七二〉刊（東京大学総合図書館霞亭文庫蔵　請求記号E22:776:601　A00:霞亭:601）
（https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100054109/6?ln=j）
・鳥居清満『分福丹頂鶴』鱗形屋　宝暦八年〈一七五八〉刊（国立国会図書館蔵国立国会図書館デジタルコレクション　請求記号 208-761）
（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8929955）
・十返舎一九『増補分福茶賀間』村田屋　寛政一一年〈一七九九〉刊（東京都立中央図書館　加賀文庫蔵　国書データベース　請求記号 25-67-9）
（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100054109/viewer/6）

## 付記

本稿は二〇二二年度おのみち文学三昧（於尾道市立大学）における口頭発表に基づき、加筆修正を施したものである。席上および発表後にご教示を賜った諸氏に厚く御礼申し上げる。また、画像の利用を許可してくださった関係機関に深く感謝申し上げる。

―かねこ・あやか　日本文学科三年生―

# 『尾道市立大学日本文学論叢』第18号目次（令和４年12月）

**研究論文**


『うつほ物語』「若小君物語」の和歌と物語
―「歌物語」論のために―　宮谷　聡美

『温故抄』下巻の欠文歌について　藤川　功和

後藤梨春編著の出版物と書肆鶴本
―『温泉名勝志』『草の蛍』『芭蕉翁行状記』を中心に―　吉田　宰

袋中良定『寤寐集』の研究
―夢・医療・まじないの視座より―　名護　崚河

ブーン系小説に関する基本的考察
―視覚要素としてのアスキーアートと〈共有〉される小説の構造―　角屋　瑛蘭

国語教科書における夏目漱石「こころ」の教材史
―学習の手引きの分析を中心に―　瀬良　寧々

令和三年度卒業論文・修士論文題目

令和三年度三年生研究発表会発表題目

彙報